

# アルベルトゥス・マグヌスにおける 神認識の媒介の意義

江口克彦

## はじめに

小論の目的は、アルベルトゥス・マグヌスにおける神認識の媒介（medium）の意味を、彼の『神学大全』第一部第二論考「享受することと使用すること、使用する者と享受する者について」および第三論考「神の認識可能性・命名可能性・論証可能性について」を主たる対象として検討することによって、アルベルトゥスにおける神認識の媒介の意義をテキストに即して明らかにすることにある。すなわち、アルベルトゥスにとって、神認識とは神の享受（fruitio dei）を目指しての認識の歩みに他ならないのであるが、そのような歩みにおける神認識の媒介の役割を検討することによって、何かを認識すること・何かを知るということはアルベルトゥスにとってどのような意味をもっていたのか、その一端を明らかにしてみたい<sup>1)</sup>。

アルベルトゥスにとって神の認識とは神の享受と分かちがたく結びついた知性の活動であった。人間は世界から得られた認識を媒介として使用することによって、神の認識、神の享受へと進んでゆく。アルベルトゥスは次のように述べている。「人間は、この世界から獲得した認識を神の認識へと関係づけ、さらにこのような神の認識を信仰へ、信仰を形象によって神を見ることへ、そして神を見ることを神を享受することへと関係づけることで、神の享受へといたることができる<sup>2)</sup>。このような神の享受へと到る過程において必要とされるのが神認識の媒介である。人間は何らかの限定された仕方によってでなければ神を認識することはできない。そしてそのような有限な仕方でも神を認識するために必要とされるのが神認識の媒介なのである。すなわち「現世において神の認識は媒介なしには不可能である。媒介とは自然あるいは恩寵における神の結果であり、自然あるいは恩寵によって神が明らかに示されているのである<sup>3)</sup>。それではこの「自然あるいは恩寵における神の結果」としての神認識の媒介とはいか

なるものであろうか。

## 1 完成する媒介

アルベルトゥスによれば神認識には二つの種類の媒介が必要とされる。完成する媒介（medium perficiens）と明示する媒介（medium ostendens）とである。以下まずこの二つの媒介についてのアルベルトゥスの所説をみてゆくことにしよう。

完成する媒介とは、アルベルトゥスによれば、可能態において認識されうるもの・可能態において認識することのできるものを、それぞれ現実態において認識されうるもの・認識することのできるものにする、そのような媒介である。一般にこのような媒介は認識対象の側からと認識する者の側からという二つの面から考えることができるのである。認識対象の側の完成する媒介とは例えば光がそれにあたる。光は色を現実態において可視的なものにするので、色を可視的なものとしていわば完成する。これに対して、認識する者の側の完成する媒介とは例えば瞳の澄んでいることがそれに当たる。何かを見ることができるとは、瞳が澄んでいること・澄んだ瞳になることが必要だからである<sup>4)</sup>。

アルベルトゥスによれば、認識する者の側の完成する媒介はどのような認識においても、すなわち可感的なものを見る場合においても可知的なものを認識する場合においても、つねに必要とされる。これに対して認識対象の側の完成する媒介は必ずしもつねに必要とされるわけではない。例えば第一の可視的なものである光はそれが可視的であるためにいかなる助けも必要としない。光そのものが可視的でありすべての可視的なものの現実態だからである。神の認識においてもまた認識対象の側の完成する媒介は必要とされない。神はそれ自体において最も可知的なものだからである<sup>5)</sup>。しかし神を認識するためには様々な種類の、認識する者を完成する媒介が必要とされる。すなわち、人間が何らかの仕方でも神を認識することができるようになるためには、様々な点で完成されていなければならない。そのために必要とされるのが神認識における認識対象の側の完成する媒介なのである。

完成する媒介とは一般に何らかの働きにむけての態勢づけ（dispositio）なのであり、そのような何らかの働きに向けて態勢づけるものとしての完成する媒介とは、アルベルトゥスによれば、習態ないしは徳にはかならない。神の認識においてそのような習態・徳としてまずあげられるのは、学知・直知・知恵といった一連の知性的徳で

ある。さらに様々な道徳的徳もまた安定し持続的な神認識のために必要とされる。道徳的徳は人間の知性をさまざまな情念の妨害から解放し持続的な知性の活動を保障するために必要不可欠なのであり、道徳的徳によって態勢づけられることによって始めて人間は安定した知性活動を営むことができるのである<sup>6)</sup>。

このように神の認識には認識する者を完成する媒介として様々な習態・徳が必要とされるのであるが、われわれはこの完成する媒介に関して次の点を付け加えておきたい。すなわち、本来の意味での神の享受が可能となるためには、アルベルトゥスによれば、人間は最も完全なもの・最高の善との結びつき (*inhaesio*) を楽しむことができるよう態勢づけられ完全なものとなっていなければならない。人間の知性的本性が最善の状態に置かれ、そしてそれによって最善のものを享受することに向けて態勢づけられていなければならないのである。もちろんそのためにはまず諸々の道徳的徳と知性的徳が必要とされる。しかし神の享受のためにはそれに加えて、真の享受に向けて人間を態勢づけるところの完成する媒介として、信仰・希望・愛という対神徳もまた必要不可欠なのである<sup>7)</sup>。

## 2 明示する媒介

それでは神認識に必要とされるもう一つの媒介、すなわち明示する媒介とはどのようなものであろうか。アルベルトゥスによれば、明示する媒介とは一般に概念・志向 (*intentio*) によって何らかのものを示すような媒介であり、可知的形象や可感的形象がそれに当たる。可知的形象・可感的形象によって可知的なもの・可感的なものが知性にあるいは感覚に示され認識されるのである<sup>8)</sup>。

神認識におけるそのような明示する媒介は「神の顔 (*facies dei*)」とも呼ぶべきものである。「神の顔」とは、アルベルトゥスによれば、何らかの仕方における神の現存 (*praesentia dei*) に他ならない。そして、最も固有な意味 (*propriissime*) における「神の顔」とは神の本質的な現存 (*praesentia essentialis*) である。このような「神の顔」はただ至福なる人々にのみ見ることを許される「神の顔」である。また固有な意味 (*proprie*) における「神の顔」とは恩寵の結果としての明白な神の現存 (*praesentia evidens*) すなわち受肉した神、キリストの顔のことである<sup>9)</sup>。

しかし、もし「神の顔」が共通的な意味 (*communiter*) で語られるならば、いまこの現世においても人間は「神の顔」に出会うことができる。使徒が述べているように

「神の見えざるところは造られたものによって明らか」なのであり、アルベルトゥスもまた神の存在を示すし（significatio）が世界の内に数多く存していることを強調するのである。もちろん、ディオニシオス・アレオバギテースの語るように、自然すなわち被造物という神の結果（effectus）のうちに神を見る者は神ではないものを見ているのであるが、神は自然という結果（effectus naturae）のうちに自らの存在を示すしを数多く配しているのである<sup>10)</sup>。

すなわち、共通的な意味では「そこにおいて神が、明白な仕方（evidenter）、認識可能な仕方（cognoscibiliter）そして現存という仕方（praesentialiter）で、原因としてあるいは自分自身として現れるところのもの」はいずれも「神の顔」と呼ばれるのであり、このような共通的な意味では神の痕跡（vestigium）と似像（imago）すなわち神の御業としての世界と神の似像としての人間の精神（mens）もまた「神の顔」なのである。そしてこの神の痕跡と似姿は、無限なものである神が有限なものであるすべての人間にとって受容可能なそして認識可能な仕方でその姿を現したものと考えることができる。われわれはこの「神の顔」としての痕跡と似像を媒介として神について何らかの認識を獲得することができるのである<sup>11)</sup>。

このように、アルベルトゥスによれば、人間は神の痕跡としての世界と神の似像としての精神から神についての何らかの認識を得ることができるのである。もちろんそのような認識は神についての明瞭な認識ではなく、あくまで曖昧なおぼろげな認識にとどまる。被造物を媒介とする神の認識・神の痕跡あるいは神の似像を通しての神認識によっては、神についての完全な認識に到達することはできないのである<sup>12)</sup>。

しかし、アルベルトゥスにとって、神の認識とは何か完成された知ではなく、むしろある種の運動・動き（motus）として理解されていたと考えられる。アルベルトゥスは、ヨハネス・クリュソストモスの大海の喩えを引用して、人間が神を認識しようとする様子を次のように描写している。「われわれは大海の岸辺を見ているあいだは、岸辺が海を限界づけているので大海を把握することができる。しかし、視線が岸辺をはなれると、われわれは大海の表面を見ることができるのみで、われわれの視覚は大海の無限の広がりなかに拡散してゆき大海の無辺際性を限定するようなものは何も見えなくなる」<sup>13)</sup>。これと同様にわれわれの精神の眼差しも被造物を離れ神の無辺際性へと導かれてゆくにつれて無限なものにおいて拡散（in infinitate diffundi）してゆく。われわれは神について確実に限定された認識（cognitio certa et finita）を

もつことはできず知性によって神に触れること（contingere per intellectum）ができるのみである<sup>14</sup>。

アルベルトゥスはこのように述べ、痕跡と似像を媒介とする神認識はつねに不完全なものにどどまらざるをえないことを強調する。しかしこのことは、神認識とはいかなる限界もなく立ち止まることもありえない終わりのない過程である、ということの意味しているのではなからうか。すなわち、ここで言われている「無限なものにおける拡散」とは、痕跡と似像を媒介とする神認識のそのような終わりのない過程を意味しているとは考えられないだろうか。

### 3 「人間は自然本性的に知ることを欲する」

人間は痕跡と似像・世界の内に見いだされる様々な事柄と自己の精神についてのより深い理解を求めてその探求をすすめ、さらにはその根拠をもとめ神の認識へとすすんでゆく。それでは何がこのような認識の歩みへとわれわれ人間を促すのであろうか。「人間は自然本性的に知ることを欲する」というアリストテレスの言葉、これはアルベルトゥスもまた認めるところである。しかし、アルベルトゥスによれば、アリストテレスのこの言葉は人間の自然本性を一般的な仕方ですべて語っているにすぎない。実際には人間はただ漠然と知ることを望んでいるのではなく何よりもまず神的な事柄を知ることを欲している、というのがアルベルトゥスの理解である<sup>15</sup>。

アルベルトゥスによれば、何かを知るといふ知性の働きにはそれを知ろうと欲する意志の働きが先行し、そのような意志の働きは漠然と知ることを欲するといったようなものではなく、自らのすべてを最善のものへ向けて秩序づけようとするそのような意志の働きなのである<sup>16</sup>。すなわち、知性の対象は何よりもまず善（bonum）として愛好されるものであり、認識するという知性の働きはこの善なるものを自らのものにしようとするに他ならない。そして、アルベルトゥスはこの点に着目して、そのような知性を情動的知性（intellectus affectivus）と呼ぶ。この情動的知性は神的な事柄を洞察しようと努力し（niti ad sapiendum divina）情意と知性の純粹さにおいて神的なものの働きを模倣すること（imitatio divinae operationis in puritate affectus et intellectus）を欲しているのである<sup>17</sup>。

「人間は自然本性的に知ることを欲する」というアリストテレスの言葉をアルベルトゥスはこのように理解しているのであるが、神的な事柄の認識を希求するとは、世界

の認識あるいは精神の自己認識から神の認識へ向かおうとする、そのような認識の歩みにほかならない。事実アルベルトゥスは「人間は、この世界から獲得した認識を神の認識へと関係づけ、そして、そのような神の認識を信仰へ、信仰を形象によって神を見ることへ、神を見ることを神を享受すること（fruitio dei）へと関係づける」と明言していた<sup>18)</sup>。ここで言われている「関係づけること」（*referre*）こそが神的な事柄を希求することに他ならないと考えられるのである。

それでは、いったい何が世界の認識・精神の自己認識から神の認識へそして神の享受へと人間を促し導くのであろうか。

#### 4 神認識における信仰の役割

アルベルトゥスによれば、先にのべたように、一般に何らかの認識が可能となるためには、認識する者を「完成する媒介」が必要とされる。何らかの認識が可能となるためには、人間はそのような認識に向けて態勢づけられなければならない、人間をそのように態勢づけるものとは様々な習態ないしは徳である、というのがアルベルトゥスの見解であった。しかし、われわれがここで注目したいのは、神認識における対神徳とりわけ信仰のはたす役割についてのアルベルトゥスの所説である。すなわち、アルベルトゥスは神認識のいずれの段階においても信仰・信じること（*fides*）が完成する媒介として働いているという点を強調しているのである。アルベルトゥスは次のように述べている。「信仰・信じることは、現世における神についての知の媒介である。神を鏡を通して見ること・謎めいた仕方で見ること・何らかの類似によって見ることに於いて、信仰による確信（*credulitas fidei*）が必要とされる。それは神を真に認識するためである。その証拠として、神の類似（*similitudo*）すなわち痕跡や似像を考察した人々の多くが、信仰を欠いていたために、多くの点で真理に背いてしまったのである」<sup>19)</sup>。アルベルトゥスはこのように述べ、神認識そして一般に認識において神への信仰・神について信じることが不可欠であると主張する。さらに神学における信仰の役割について次のようにも述べている。「神学する者にとって、信仰とは光であり、信仰の対象との最も確実な結びつきと承認である。そしてそれゆえ、神学する者にとって信仰とは神的な事柄の真理についての知へと到る道ないしは媒介なのである」<sup>20)</sup>。

それでは信仰こそが真の知へ至る道であり媒介であるとはどのような意味で言われているのであろうか。アルベルトゥスにとっても信仰は「知解を求める信仰」でなけ

ればならないのであるが、それは信じられたものを使用して信じられたもののさらに深い理解を求めることである。そしてまたそのような深められた理解によって信じられたものがより深く信じられたものとなることでもある。アルベルトゥスは次のように述べている。「信仰はわれわれを信仰の対象の知へと導くのであり、また信じる者を信仰の対象の知解へと促す。この信仰という媒介によって信仰の対象の知解が探求され見いだされる」。すなわち「信仰は見えざるもの確証 (*certitudo invisibilium*) へと人間を導くのである」<sup>21)</sup>。

アルベルトゥスは、このような信仰の深まり・神認識の深まりを、いまだ形をなしていない信仰 (*fides informis*) すなわち漠然とした神の存在の認識から、明確な形をとった信仰 (*fides formata*) すなわち万物の始原 (*principium*) であるとともに観照の対象・人間を至福へと教え導く三にして一なる神の認識への歩みとして理解している。世界の認識から万物の第一原因が存在することの認識へ、たんなる第一原因の存在についての認識からそのような第一原因が万物の作出因でありイデア的範型因であり目的因であり万物の造物主であることの認識へ、という神認識の深まりによって、われわれの神への信仰はより深いものとなってゆく。さらに神の似像を通しての神認識の深まりもまた神への信仰をより深いものにしてゆく。アルベルトゥスによれば、われわれの精神は神認識の深まりとともに、三にして一なる神により似たものへと形成されてゆき、たんなる可能態における神の似像から現実態における神の似像へと変容してゆく、というのである<sup>22)</sup>。

このように神の存在することへの漠然とした信仰・信は、信仰の知解として神のより明確な認識を促し、神についてのそのような認識は信仰により明確な形を与えることになる。そしてこのように信仰と知解は相互に働きかけながら人間を神の認識から神の享受へと導いてゆく。信仰とは信仰の対象との「最も確実な結びつきと承認を生み出すもの (*faciens certissimam adhaesionem et assensum*)」<sup>23)</sup>だからである。このような意味で、信仰は神についての真の知へ至る道であり媒介である、と言われていたのである。

ところでこのようなアルベルトゥスの立場は神認識そして一般に認識における愛 (*caritas*) の果たす役割を強調するものである。いま「信仰とは信仰の対象との最も確実な結びつきと承認を生み出す」と述べたが、そのような信仰の「最も確実な結びつきと承認」の対象は同時にまた愛の対象だからである。それでは神認識において愛

はどのような役割を果たしているのであろうか。

## 5 神認識における愛の役割

冒頭で述べたように、アルベルトゥスにとって神の認識とは神の享受と分かちがたく結びついた知性の活動なのであるが、神の享受とは最も完全なもの・最高の善である神との結びつき（*inhaesio*）を楽しむことに他ならない。アルベルトゥスによれば、このような神の享受へむけての態勢づけという観点からすれば、諸々の習態・徳のうちで最も主要な徳は愛である。享受はそれが享受の対象に結びつこうとする意志の働きである限りにおいて愛に属する働きであり愛によって方向づけられているのである。すなわち、アウグスティヌスも述べているように、愛する者は自体的に愛されるものに結びつこうとするのであり、そのような結びつきを実現するために、知性は世界から獲得された認識を享受の対象としての神へ関係づける。このような意味で神の享受において愛が最も主要な習態・徳であると言われるのである<sup>24)</sup>。

アルベルトゥスはこのように神の享受における愛の役割を強調するのであるが、神の享受や神の認識においてばかりでなく世界の認識あるいは精神の自己認識においてもまた愛がきわめて重要な役割を果たしているというのがアルベルトゥスの確信するところであった。

先に述べたように、アルベルトゥスは「人間は自然本性的に知ることを欲する」というアリストテレスの言葉を、人間は自然本性的に神的な事柄の認識を希求しているという意味に解するのであり、そのような神的な事柄の認識についてアルベルトゥスは次のようにも語っている。「人間は、知性によって、第一のもの、最善なるもの、最も甘美なるものに接触し、また神の御業全体において意図されたものに接触する。そしてその時、人間はこの第一のものを自らの内に吸収し自らの内で再現させ養育することで、それを享受する」<sup>25)</sup>。

われわれは、ここでアルベルトゥスの言う「知性によって、第一のもの、最善なるもの、最も甘美なるものに接触し、また、神の御業全体において意図されたものに接触する」とは、知性によって認識された事柄を神へと関係づけることであると考えたい。ここで言われている「接触」とは「無限なものとの接触」「無限なものにおける拡散」、世界の認識・精神の自己認識から神の認識へとという認識の歩みに他ならないからである。そして人間が「この第一のものを自らの内に吸収し、自らの内で再現さ



せ、養い育てることで、それを享受」しようとするのはまさに愛の働きによる。われわれが目指したいのはこのような愛の働きなのである。

アルベルトゥスによれば、人間はこのような神の認識そして神の享受にいたる過程そのものをも享受することができる。一般的に言えば享受とは、喜びをもって何らかの仕方で使用すること、すなわち事物の善を喜びをもって受け取ることなのであるが、そのような意味において人間は神以外の多くの事柄をも享受することができる<sup>26)</sup>。それゆえ、世界の認識を通してあるいは精神の自己認識を通して享受されるものを問い求めることは、人間をある意味で至福な者たらしめる。もちろん、そのような至福はいわば「被造的至福」(beatitudo creata)であり真の至福へ向けての態勢づけでしかない。しかし人間はこの真の享受へといたる過程そのものをもいわば「道具的(instrumentaliter)」に享受することができるのである<sup>27)</sup>。そして人間はこのような「道具的」享受において享受されたものを本来の意味での享受されるものに関係づけようと欲する。それはちょうど甘い香りをかぐ者がその甘い香りを楽しみつつ甘い味のするものを求めそれを味わおうとするのと同じである。人間は痕跡としての世界と似姿としての精神についての認識を享受することによって、神そのものの認識へと誘われるのである<sup>28)</sup>。

このような認識の過程において人間を神の認識へと誘うもの、それが愛に他ならない。アルベルトゥスによれば、神そのものの認識においてだけでなく自然の認識すなわち世界の認識と精神の自己認識においてそのような認識へと人間を駆り立てるのも愛の働きである。「人間が自然本性的に知ることを欲する」のは神への愛に導かれてのことなのである。われわれはこのような意味で、アルベルトゥスにおいて世界の認識も精神の自己認識もともに神への愛に促されての知性の働きとして理解されていた、そのように考えるのである。

## 結 び

アルベルトゥスにとって、現世における神認識とは、世界の認識、精神の自己認識を経て、そのような認識を享受しながら、神そのものの認識、そして神の享受をめざし、一步一步進んでゆく、そのような認識の歩みであった。そしてそのような認識へと人間を促すのが神への愛であった。その意味で神認識の媒介のうち最も根源的なものは愛であるということができよう。神への愛に導かれ、神の存在についての漠然と

した信から、より明確な形をとった神への信仰へと進んでゆくのである。しかし、このような現世における認識の歩みは何よりもまず知性的徳を通してなされると解すべきであろう。人間は現世においては神の痕跡と似像についての認識を深めることによってのみ、神の認識へと接近することができる。アルベルトゥスにとって、何かを認識すること・何かを知るということは、このような終わりのない過程、自己の完成をめざすある種の運動であったといえよう。人間は神の御業としての世界と精神をより広くより深く探求することによって、「神の知はわれわれにとって実に驚嘆すべきもの、それは堅固であり、わたしはこれに到達することはできない」<sup>29)</sup>ことをより深く知る。そして世界と精神がまさに「驚嘆すべきもの」であると知ることによって、人間はさらなる探求へと駆り立てられるのである。アルベルトゥスにとって世界と精神の認識は、神そのものの認識へといたる果てしなき道であると同時に、それ自体が驚きにみちた現世において可能な神認識であったと考えることができるのではなからうか。しかしこの点に関してはさらなる検討が必要であることはいうまでもない。さらに、およそ何かを知るということは人間の生全体にとってどのような意味を持っているのかという問題に関するアルベルトゥスの見解を明らかにすることもまた、今後の課題としなければならないであろう<sup>30)</sup>。

#### 注

- 1) テキストは Alberti Magni Opera Omnia, tomus XXXIV, pars 1, *Summa theologiae sive de mirabili scientia dei*, I, 1978 Münster; tomus XIV pars 2, *Super Ethica*, VI-X, 1987 Münster. を用いる。
- 2) *S. Th.*, I, tr.2, q.8, c.1; Ed. Colon. T.XXXIV, pars 1, p.28, 63-68. アルベルトゥスにおける神の享受に関しては拙論“Ein Aspekt des praktischen Charakters der Theologie bei Albert dem Großen”, in *Theologie und Glaube*, vol.88, heft 3, pp.365-373 (1998)「アルベルトゥス・マグヌスにおける神の享受 (fruitio dei) の意義」(『同志社哲学年報』第22号, pp.46-60, Societas Philosophiae Doshisha・同志社哲学学会編, 1999年)を参照されたい。
- 3) *S. Th.*, I, tr.3, q.15, c.1; p.58, 38-41.
- 4) *Ibid.*, tr.3, q.13, c.4; p.46, 64-75.
- 5) *Ibid.*, tr.3, q.13, c.4; p.47, 4-14.
- 6) *Ibid.*, I, tr.2, q.7, c.2.; p.26, 72-p.27, 1;1-11. *Ibid.*, tr.3, q.13, c.4; p.47, 15-19. *Super Ethica*, X, lect.11, q.2; Ed. Colon. T.XIV, pars 1, p.749, 15-32.

- Ibid.*, lect.16, q.5; p.774, 23-40. *Ibid.*, lect.10, q.1; p.743, 85-p.744, 7. *Ibid.*, lect.12, q.2; p.757, 21-27. *Ibid.*, lect.12, q.3; p.757, 50-64.
- 7) *Ibid.*, lect.13, q.1; p.759, 52-62. *Ibid.*, lect.16, q.6; p.775, 14-17. この問題に関しては、拙論「アルベルトゥス・マグヌスにおける哲学的観照 (contemplatio philosophica)」(『哲学論究』第14号, pp.1-19, 同志社大学哲学会編, 1998年)を参照されたい。
- 8) *S. Th.*, tr.3, q.13, c. 4; p.46, 55-58. アルベルトゥスによればこの「明示する媒介」が本来的な意味での認識の媒介である。
- 9) *Ibid.*, tr.3, q.13, c. 4; p.46, 26-53.
- 10) *Ibid.*, tr.3, q.15, c. 1; p.58, 38-50. *Ibid.*, tr.3, q.13, c. 4; p.46, 3-25. *Ibid.*, tr.3, q.14, c. 2; p.53, 21-39. Cf. *Rom.*, I, 19. Dion., *Epist.*, 1 (PG 3, 1065A).
- 11) *S. Th.*, I, tr.3, q.13, c. 4; p.46, 3-25. *Ibid.*, tr.3, q.13, c. 6; p.49, 73-78.
- 12) *Ibid.*, tr.3, q.15, c. 2, art. 1, I; p.60, 49-75. *Ibid.*, tr.3, q.15, c. 2, art. 1, I; p.60, 86-98.
- 13) *Ibid.*, tr.3, q.13, c. 1; p.40, 39-47. Cf. Ioh. Chrys., *Hom. 2 in Ioh.* n.4. (PG 59, 34-35).
- 14) *S. Th.*, I, tr.3, q.13, c. 1; p.40, 39 - p.41, 20. *Ibid.*, tr.3, q.13, c. 1; p.41, 21-26.
- 15) *Super Ethica*, X, lect.11, q.5; p.753, 21-24. この問題に関してしては、拙論「アルベルトゥス・マグヌスにおける哲学的観照 (contemplatio philosophica)」を参照されたい。
- 16) *Super Ethica*, X, lect.16, q.3; p.773, 43-49.
- 17) *Ibid.*, lect.11, q.7; p.754, 30-34. *Ibid.*, lect.13, q.1; p.759, 63-70. アルベルトゥスにおける情動的知性 (intellectus affectivus) に関しては次の文献を参照。W. Senner, "Zur Wissenschaftstheorie der Theologie im Sentenzenkommentar Alberts des Großen", in *Albertus Magnus Doctor Universalis 1280/1980*, eds. G. Meyer OP und A. Zimmermann, pp.323-343, 1980 Mainz.
- 18) *S. Th.*, I, tr.2, q.8, c. 1; p.28, 63-66. Cf. [2]
- 19) *Ibid.*, tr.3, q.15, c. 3, art.1; p.77, 39-47.
- 20) *Ibid.*, tr.3, q.15, c. 3, art.1; p.78, 32-37.
- 21) *Ibid.*, tr.3, q.15, c. 3, art.1; p.77, 14-38.
- 22) *Ibid.*, tr.3, q.15, c. 3, art.1; p.77, 14-38. *Ibid.*, tr.3, q.15, c. 2, art. 1, I; p.60, 6-20; 86-98. *Ibid.*, tr.3, q.15, c. 1; p.59, 21-43. *Ibid.*, tr.3, q.15, c.2, art. 2, I, A.; p.66, 75 - p.67, 5.
- 23) *Ibid.*, tr.3, q.15, c.3, art.1; p.78, 32-34.
- 24) *Ibid.*, tr.2, q.7, c.2; p.27, 1-11.

- 25) *Ibid.*, tr.2, q.7, c.1; p.25, 12-16.
- 26) *Ibid.*, tr.2, q.9; p.31, 67-70.
- 27) *Ibid.*, tr.9; p.31, 74-76.
- 28) *Ibid.*, tr.2, q.12, c.1; p.35, 80-p.36, 3.
- 29) Ps. 138, 6. Cf. *S.Th.*, I, prologus; pp. 1-4.
- 30) 本小論で言及したように、アウグスティヌスとディオニシオスはアルベルトゥスの思想の重要な源泉である。彼らに関するアルベルトゥスの理解をめぐる問題もまた今後の課題としたい。